

収蔵作品による小林清親 増補サプリメント

練馬区立美術館（中村橋） 2021. 11. 23～22. 01. 30



「小林清親」(1847～1915)は、“最後の浮世絵師”とも呼ばれる明治期を代表する画伯で、デビュー作「東京シリーズ」は淡く明るい色調で光と影、天候や時間を表現したまるで水彩画のような木版画で“光線画”と呼ばれていた。この光線画の魅力は、輪郭線を極力無くしてうつろい行く空の表情、夕景、夜の明かりなどの繊細な表情を、光と影で表現しているところに、どこか郷愁がただよう。画伯はそれ以降も、戦争画や歴史画、戯曲などを描き続けて、浮世絵画の有終の美を飾るとともに、明治期芸術家たちに影響を与えた。

当館では、2015年に清親没後100年を記念し、その生涯を約300点の作品・資料で辿る「小林清親展 文明開化の光と影をみつめて」を開催している。

この展覧会が機縁となって、画伯の作品や資料を約300点の寄託を受け、この中には世に“小林清親写生帖”として知られる光線画の源泉となったスケッチブックや未公開の下図類、自作の手箱、着用の袴などの身の回りの遺品も含まれている。本展ではそうした未公開、再発見の貴重な作品・資料を中心に展示し、前回の「展覧会のサプリメント(増補)」として開催される企画である。

小林清親 《アラビアンナイト》水彩/紙 制作年不詳 上図

小林清親 《九段坂五月夜》 大判錦絵 1880(明治13)年



題名のごとく、五月の夜を照らす慰霊の高灯台を描いた作品であるが、九段坂の灯台は海から見えないだろうから、象徴的な機能しか果たしていなかったと思われる。

人々が携えた堤灯の光が地面に映り、雨降りの情景が見事に描かれてい

て、傘をさした往来を行き交う人物は、全てシルエットであるが、細部を見ると墨の濃淡で着物の筋や陰影が表現されている錦絵である。